

プリオン病感染予防ガイドライン(2020年版)ハイリスク手術手技の解釈について

2020年に脊椎手術の貸出器械(Loan Instruments)を使用した患者さんが、後日プリオン病を発症したことが判明し、厚労省も含めた調査委員会が開催されました。幸い貸出器械を介した感染はみられておりませんが、2021年3月10日付で日本整形外科学会ホームページでも注意喚起されております。また、日本脊椎脊髄病学会会員の先生方に対しては、2021年7月15日付でプリオン病感染予防策の遵守について改めて周知・徹底をお願いさせて頂いたところですが、「プリオン病感染予防ガイドライン(2020年版)」に記載されておりますハイリスク手術手技の解釈について、以下の委員会等で討議を致しましたので、ご理解をお願い致します。

2022年4月1日

日本脊椎脊髄病学会

安全医療推進委員会

担当理事

高相晶士

委員長

今釜史郎

日本整形外科学会

安全医療推進・感染対策委員会

担当理事

伊藤淳二

委員長

中島勸

アドバイザー

酒井紀典

骨・感染術後感染予防ガイドライン策定委員会 委員長

プリオン病感染予防ガイドライン 2020 作成委員 松下和彦

プリオン病感染予防ガイドライン 2020 年版では、プリオン病の感染性が高いハイリスク組織を扱う手技(ハイリスク手技)とされるのは、以下のようになっています。

1. 硬膜を穿刺または切開する手技
2. 脊髄後根神経節を包む周囲組織を展開して神経節自体に接触する手技
3. 硬膜外の手術であっても術中操作により、髄液の漏出が見られる等、結果的に硬膜を穿刺または切開した場合

上記 2 の「展開して」は、プリオン病感染予防ガイドライン 2008 年版から誤って転載されていることが判明しました。正しくは、以下のようになります。

プリオン病の感染性が高いハイリスク組織を扱う手技(ハイリスク手技)とされるのは、

1. 硬膜を穿刺または切開する手技、
2. 脊髄後根神経節を包む周囲組織を切開して神経節自体に接触する手技
3. 硬膜外の手術であっても術中操作により、髄液の漏出が見られる等、結果的に硬膜を穿刺または切開した場合

ここで述べている周囲組織とは、骨や靭帯などの組織ではなく脊髄後根神経節を包む膜のことと、ご理解ください。